コンラート・フィードラーの芸術論

－その歴史的意義と可能性－

寺尾　錬（人間学コース）

（指導教員：堂囿　俊彦）

キーワード：フィードラー、芸術、制作と鑑賞、認識

序論

現代において芸術を鑑賞することは容易になっている。このことは、公共施設として美術館が設置されていることや、学校教育のカリキュラムの一部になっていることからも認めることができるであろう。しかし、芸術作品の鑑賞を、「芸術体験」と呼ぶことはできるだろうか。本論では、ドイツの芸術哲学者であるコンラート・フィードラー（1841-1895）の芸術学を取り扱うことで、芸術における制作（実践）と鑑賞との関係について確認する。第１章ではフィードラーに影響を与えたカントの芸術学・美学を概観することにより、フィードラー芸術学の歴史的な経緯を確認する。第２章では、フィードラーの主要な著作である『藝術活動の根源』から、彼がどのように芸術論を展開したか、また、制作と鑑賞の関係をどのように構築したかを確認する。第３章では、フィードラーが仔細に言及しなかった造形芸術以外の芸術領域についても検討することによって、フィードラー芸術学から発展するような制作と鑑賞の関わり方の可能性について考察する。

第一章　カント哲学と芸術

第一節　主観による世界の構成

フィードラーは、カントから大きな影響を受けていた。フィードラーの芸術活動は、認識活動としての側面を持つ。そのため、芸術の実践のなかで、視覚による感性的な把握を試みる点が、活動のなかでも重要な要素を持つ。そのようなフィードラーにおける芸術活動の認識論的な側面において、対象の把握は、対象の作用を受け取ることで表像を作り上げていることを意味しており、ここにカント哲学の影響が伺える。カントの『純粋理性批判』においても、物自体をそのまま把握することが不可能であり、認識主体の能力によって対象から受け取ったものを秩序づけることが必要となる。世界を構成するというカントの哲学は、フィードラーも同様に述べている素朴実在論的な認識の拒絶と繋がるだろう。

第二節　美と芸術

しかし、カントにおける芸術と美への態度は、フィードラーとは異なるものであった。カントにとって、芸術とは「美」と密接に結びついたものであり、芸術の美は、鑑賞する者に快の感情を呼び起こすかどうかの点で判断されるものであった。

第三節　自然美と芸術美

さらにカントは、美のなかでも「自然美」に優位性を見出している。すなわち芸術活動とは、人間の意図などを作品に表出することではなく、自然の美しさを取り出すような活動なのである。さらに、たとえ対象が美しくないものであっても、本来の美しさを芸術によって取り出すといった姿勢さえ見せる。このようにカントの芸術は、「美」と「快」を中心として取り扱われる。しかしフィードラーの芸術論は、認識論と関係しながらも、芸術を美や快から切り離して捉えようとするのである。

第二章　コンラート・フィードラーの芸術学

第一節　世界の認識

フィードラーは、彼の中心的な著作である『藝術活動の根源』（1887年）において、芸術が哲学や美学などの一部に内包されてしまうのではなく、独自の地位を確立できるような芸術学を目指した。

１章でも述べられたように、フィードラーの芸術学は、世界そのものを把握できるという素朴実在論的な姿勢を否定することから始まる。われわれは、事物そのものではなく、対象である事物の作用を受け取っており、それを現実に構成しているのである。こうした構成において大きな役割を果たしているのが言語である。私たちは、対象を把握する際には、言語を用いて把握している。例えば、りんごを把握する際には「りんご」という言葉を用いることで対象をラベリングし、概念形成や表現を行なってきた。しかし、それらは対象をそのままに、変化することなく扱うことではない。言語によって対象を取り扱う時点で、私たちのなかで保持された対象の内容をただ単に外へと配達するのではなく、身体の過程に影響を受けることによって、変容してしまう。つまり、言語とは対象を鏡のように表すものではなく、「対象に対する別の形」の存在である。もちろん、言語にも役割が存在する。私たちが対象から受け取る現実の素材は混沌としていて多様であり、その乱雑さを秩序立てる能力が言語には備わっている。しかし、そのような統制は現実素材が持つ多様さと、発展の可能性を閉ざしてしまう。つまり、人間の認識において言語

本要旨は、『2018年度　静岡大学人文社会科学部社会学科　卒業論文要旨集』第15号に掲載されたものを、著者の許可を得て掲載するものである。許可なく転載することを禁止する。

や記号、概念が関連する時、フィードラーにとって、それらは人間の根源的な世界の把握とは離れた出来事になってしまうのである。

第二節　芸術活動とは何か

しかし、言語や概念による把握は、必然的なものではない。フィードラーによれば、ある感覚器官において所有した現実素材を、言語や概念と関連させずに所有することで、変容することのない純粋な現実素材を保持することは可能である。フィードラーは、中でも目による「可視性」に集中した現実素材の把握に着目し、このような対象の把握に、高度な視覚像へと発展する可能性を見出した。これらが主要なテーマである「芸術活動」に関わる。

目によって得た対象の現実素材は、例えば触覚などと違い、可視性を備えたままで、表現によって発展できる可能性を持っている。しかし、目で得た現実素材を、言語や概念と関連させずに保持することは、人間にとって不安的な状態である。また、目そのものは現実素材を表現として発展させる機能を持っていない。それを、同様の可視性を備えた表現へと発展させる役割として「手」が登場する。目によって得た素材を、そのまま手の継続的な仕事によって作品へと表現することにより、純粋な視覚像による認識を進めることができるのであり、これが芸術体験なのである。しかし彼にとって、こうした体験は、以上の活動を行うための感性的な能力を持つ、限定された者のみが得るものである。そのために芸術活動は、例えば科学のような、全人類に共有されうるような価値を持たないとさえフィードラーは述べており、主観的な活動の側面を持っている。

第三節　芸術鑑賞の意義

フィードラーの芸術理論は、芸術作品の鑑賞体験が、目と手による実践的な芸術活動と同様の体験ではないと判断している。あくまで制作の過程にこそ芸術活動の本質が存在しているとしたフィードラーは、鑑賞に加えて、完成してしまった作品そのものにも大きな価値を見出してはいない。それでも、芸術家同士においては、同様の才能を持っていれば時代や国境を超えて、作品を理解できる余地が残されている。しかし、能動的な姿勢による感性的な認識を行わず、実践を伴わない一般人がただ鑑賞することについて、フィードラーは厳しい態度を取っている。なぜなら、そのような鑑賞は、芸術作品に対して美や快、知識などを関連させてしまうからである。以上のことから、フィードラーは、芸術を美などの領域ための手段や道具にしてしまうことを避けることによって、芸術を芸術そのものの目的とできるような地位の確立を求めたのである。しかし、それは芸術が芸術家の間でしか扱えないような排他性も生み出しているように感じられる。

第３章　「造形芸術」からの展開

最終章では、フィードラーの芸術学では触れられなかった造形芸術以外についての芸術領域に対し、彼の芸術理論を適用することは可能なのか、また「目と手」における感覚領域の関係ではない、別の感覚器官において発展の可能性があるかを検討する。

本論では、音楽芸術に着目することで、フィードラーの芸術理論に対して異なる観点を取り入れて検討した。目と手の関係による発展を、耳とそれ以外の感覚器官で発展することが可能であれば、例えば、耳で得た聴覚性を楽譜といった記号性と結びつけずに、楽器などを用いて表現することで、音楽芸術でもフィードラーの芸術理論が適用できることを示した。さらに、音楽芸術の場合、楽曲の制作と鑑賞の間に「演奏」が介在するが、これにより、芸術家のような能力をもたない者でも、より能動的な姿勢をもって芸術に関わり、表現できる可能性を示した。

結論

フィードラーの芸術論の特徴は、芸術の本質を芸術の制作活動に見いだし、鑑賞と作品そのものに大きな意味を認めない点にある。もちろん、現代の芸術の対象は、自然のみならず抽象的な対象や社会問題などが含まれていること、芸術の領域そのものが拡大されていることから、フィードラーの芸術論をその全てに適用することは困難な可能性がある。また、フィードラーの芸術論は、美や快、知識などを遠ざけてしまうが、現代においてそれらを享受しながら芸術を鑑賞している私たちにとっては、その全てを受け入れることは難しいように感じた。

しかし、そのような難点を持ちながらも、フィードラーの芸術理論は、制作者の側である芸術家には勇気を与えるものではないだろうか。鑑賞者を芸術活動において重要な要素としないことは、外的な評価に重きを置かないことも意味する。多くの鑑賞者に理解されることが難しいような難解な作品や、美しくない作品を制作することについて、フィードラーの芸術理論は、肯定的な姿勢を指し示すことができる芸術学の一つして検討できる可能性を持っているのではないだろうか。

主な参考文献

- コンラート・フィードラー 『藝術活動の根源』（山崎正和、物部晃二訳）,1887 年 山崎正和（編）『近代の藝術論』中央公論社,1979 年,61 頁～169 頁
- 福井 栄一郎『音楽』,井島　勉（編）『芸術の世界』創文社,1964 年,199 頁～234 頁
- 米澤 有恒『芸術を哲学する　現代美学批判』世界思想社,1997 年

本要旨は、『2018 年度　静岡大学人文社会科学部社会学科　卒業論文要旨集』第 15 号に掲載されたものを、著者の許可を得て掲載するものである。許可なく転載することを禁止する。